



会報誌 有縁千里

うえんせんり Vol.30

今回の特集

- ・養父市の葬儀形態の変化
- ・七日ごとの法事の理由
- ・社員募集
- ・本のプレゼント

株式会社 西村交益社
http://www.koekisha.info/



携帯 QR コード

春節と爆竹

二〇一二年の旧正月は、一月二十三日でした。中国では春節といえます。東アジアの国々の多くは、新暦の一月一日より、旧暦の正月である春節を盛大に祝います。

正月番組で某旅行社の社長が、「最近の若者は国外に出たがらない」と、嘆いていましたが、八〇年代前半、格安航空券が個人でも購入することが出来始め、それにより、バックパッカーと呼ばれた多くの若者が、世界中に出かけて行きました。同じ頃、制限付きではありましたが、中国大陸への個人自由旅行も解禁されました。私も八〇年代前半から、ディープな中国に魅せられ、毎年のように大陸をフラフラと、さまよっております。

一九八八年の春節は、中国の広州で迎えました。改革開放経済の始まった中国で、香港に一番近い大都市の広東省広州市では、その年、真夜中の午前零時になると、とてつもない数の爆竹が一齐に鳴り始めました。

中国では、新年を迎えたとき、結婚式や新築祝いときなど、慶事には爆竹を鳴らします。爆竹が邪気を払うと考えるのです。

真夜中の爆竹は、まるで突然始まった市街戦で、機銃掃射をされたかのような感じでした。中国の都市では、ほとんどの家庭がアパートなどの集合住宅に住んでいます。そんな自宅の玄関先で爆竹を鳴らします。

コンクリートの階段に響く爆竹の音は、反響して何倍もの大きさに聞こえます。また、窓の外に爆竹を放り投げる人もいて、アパートの高層階から投げられた爆竹は、はじけながら落ちていきました。下の階の住民はたまったものではありません。でも、驚いているのは私だけ。友人たちはみな、驚く外国人を見ながら笑っています。

計画経済から社会主義の殻を着た自由主義経済に変わった当時の中国は、南に行けば行くほど、自由な雰囲気を感じられました。その最南端とも言える広州は、当時共産中国の中で、もっとも自由な風が吹いていた街でした。眠ったふりから正気に戻った熱気ある人々の姿は、誰の目にも彼らの価値観が、思想から経済に戻ったことがわかるものでした。オイルショック前の日本の姿に似ている雰囲気を感じました。

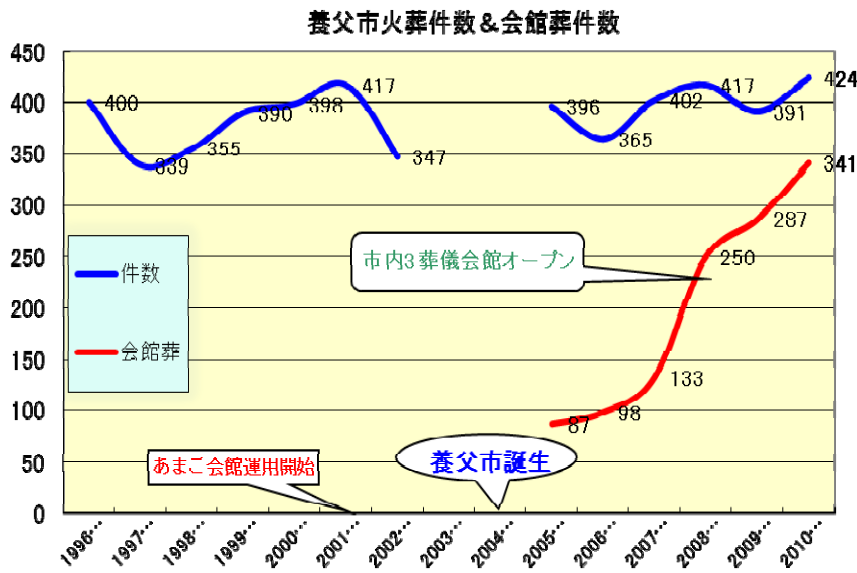
治安や環境を理由に、一九九四年から禁止されていた北京での爆竹が、二〇〇六年には解禁されました。文化や伝統は、恣意的な思いでは変えることが出来ないことを証明しているようにも感じられます。



不要の方はお手数ですが下記迄ご連絡ください。今後一切送付しないよう致します。TEL 079-662-5909

養父市の葬儀形態の変化

ここに九六年度から一〇年度までの、養父市内火葬件数と会館葬件数のグラフがあります。市外の方も利用されるため、火葬件数が、そのまま市内の死亡者数ではありませんが、どの年度も市外の方の利用は数%もないので、ここでは火葬件数が市内の死亡者数と考えてみます。〇三年度と〇四年度に関しては、残念ながらデータが手元ありません。市役所にも残っていないようです。



このグラフを皆さんは、どう見られるでしょうか？例えば国立社会保障・人口問題研究所によれば、日本の死亡者数は右肩上がりに増加すると予測が出ていますが、この十五年間の養父市に限って言えば、そうではないことが見て取れます。一九九五年の養父郡の人口は約31,290人。二〇一一年三月末の養父市の人口は約27,326人。その差3,964人。毎年約264人の減少です。また、死亡率は一九九五年度が127.8%、一〇年度が155.1%です。十五年間で0.273%、一年に換算すると0.0182%ずつの増加です。これは、市内で毎年七人程度死亡者数が増加する計算になります。人口が毎年264人減少していく中で、死亡者数はあまり変化がないというのは、死亡率が増加しているためであると考えられます。

それではこの十五年間で約百人も市内死亡者数が増加したかと言え、最小値と最大値だけを見れば、そうとも言えるし、九六年度と一〇年度の数字だけを見れば、決してそうだとは言えません。人口学者は通常、甘い数字、厳しい数字、そしてその中間の三種の数字を常に用意しているそうです、また、口の悪い学者に言わせれば、予測値など毎年のように修正しているから、予測した本人ですら、どれが本当かわからない。なんて笑話にならない話まであるそうです。

ただ、会館葬の件数に目を移すと、その変化には驚くような数字が出てきました。〇五年度には約22%であった市内会館葬率が一〇年度には80%を超えました。ちなみに会館葬件数の中には、公会堂やお寺を使用した数は含まれていません。これらを含むと、純粋なる自宅葬は一〇年度では約15%程度だと推測されます。また、年度途中ですが、二〇一一年四月〜十二月までの間、火葬件数311件中、会館葬二六六件、自宅葬30件、その他15件となっています。このままだと、一〇年度には市内の自宅葬は10%を割り込むと思われる。一〇年度にはほぼ0%であった市内の会館葬件数は、わずか十年で90%を超えます。死亡者数に際立って変化が見られないのに、葬儀形態には大きな変化があったのがこの十年です。



養父市民の葬儀形態は、一九六一年に当時の郡営斎場が運用され始め、大きく変化しました。それまでは、土葬が当たり前であった葬儀形態が、火葬率ほぼ100%になるまで、十年足らずであったと記憶します(私が小学校低学年であった六十年代には弊社にも時折、土葬用の座棺の注文があったが、それ以降には全く記憶にないことからこれは推測されます)。



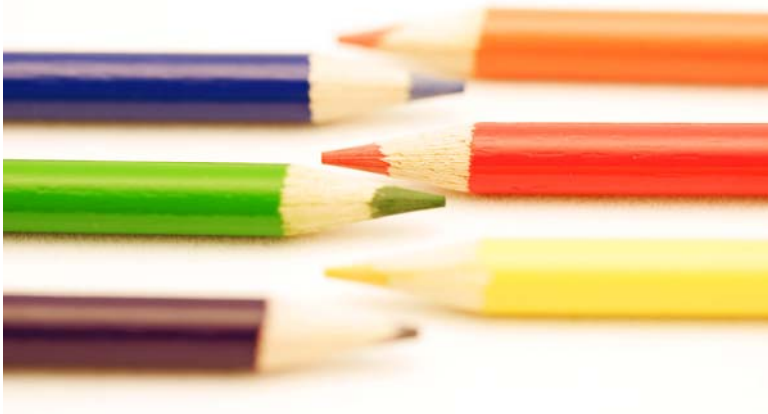
現在は、自宅葬から会館葬に葬儀形態が急速に移行しています。しかし、但馬全域がこのスピードで変化しているかと言えばそうではありません。正確な記録ではないですが、豊岡市の同業他社に聞いたところ、豊岡市では三割以上がいまだ自宅葬であるらしいです。

それと比較すると、養父市の変化がいかに劇的であるかご理解頂けると思います。この変化のスピードは、葬儀業界の関係者ですら、予測を超えたものです。

会館での葬儀、自宅での葬儀、どちらがよいなどと言いたいため、グライフをお見せしたわけではありません。そもそも、葬儀は自宅で行われていたと思う方がほとんどであるかもしれないが、日本の歴史から見ると、庶民の葬儀が本格的に自宅で行われ始めたのは、明治以降だとの学説があります。

これから先、どのように変化していくのか、グライフを見ながら妄想していた次第であります。

社員を 集しています
の方 迎 集 数 2
は 口



人が亡くなってから、七日ごとに法事をおこないますが、最近では何のためにするのかを存じない、お若い方が増えていっています。

■ 七日目の法事

これは、仏教の考え方で、死者は七日ごとに冥界(死の世界)の七人の王によって生前の罪について審判が行われるということになっています。それが済むまで、死者は新しい生をうけて生れ出ていることはできないのです。

その間を中陰(中有)といい、亡き人に少しでも良い審判が下り、再び幸せな生をうけられるよう、身内の人だけでもご住職を招いて読経し、追善の供養をします。それは亡き人に代わっての善行(滅罪)になります。

特に四十九日目は、最後の審判が行われる日とされるので、亡き人の成仏を願って、親しい人や親戚を招いて、忌明けの法要を行います。(地方によっては、三十五日に忌明け法事と納骨をおこなうところもあります。これを満中陰といいます。

何のためにおこなうかの意味が少しでもわかれば、心の持ちようも違ってくるのだと思います。

1960 年代の八鹿小学校



第 14 回有縁会 村山順子さん講演会 「今に生きる」

～思い続け、行動し続けければ願いはかなう！

亡き夫からの手紙に支えられ～



とき:2月11日(祝)
ところ:つるぎ会館
14時～ 入場無料

健康・生きがい開発財団・生きがいづくりアドバイザー

(有)プロシード(ひまわりサービス)会長・暮らしの学校主宰。

急逝した夫の残した『手紙』に力をもらい、立ち直った経験から、体験型セミナー『大切な人に素直な気持ちを届ける手紙のセミナー』を主催。起業等をテーマに講演多数。

本の紹介

米田啓祐・西村徹編

「東井義雄 一日一言」

致知出版社 一二〇〇円

生誕百年ということ、この元旦から朝日新聞に、東井義雄先生の特集が一週間にかけて掲載されました。日本のペスタロッチと言われた先生が八鹿小学校で定年退職を迎えられた時、四年生であった私は、東井先生の教えに直接触れることのできた最後の世代だと思っています。

当時を思い出すと、どの教室にも黒板の隅に「命は一つよ」という言葉が書かれていました。あの頃はよく理解できませんでした。半世紀生きて感謝しています。子供や教職員に語られた言葉、著書に書かれた言葉、そんな珠玉の言葉が詰め込まれております。

右記の書籍を抽選で三名の方にプレゼントいたします。×切は二月二十九日。

静夜思

前号を発行してから、僅か一月余りでの発行です。前号では評価が様々でありました。いや、散々でした。曰く、「軽い読み物がない」、「分量が多すぎる」、「いよいよ宗教色が強くなった」、「好きなこと書きすぎている」等等…また、「そもそも発行の主旨とズレテル」、などの声もありました。

ただ、「講演会の内容がよくわかった。参加できなかった者にも青山老師の話を聞いた気になった」とのお褒めの言葉も頂きました。さらに、「筆者の真摯な姿勢には、自らの襟を正した云々…」などの言葉まで頂戴したりして、恐縮致しました。

確かに、最初の頃ほど、あまねく周りに気配りして言葉を慎重に選んでいる訳ではなく、なっているのかもしれませんが。その分、我(が)が出ているのだと思います。

たぶん、これからも、右に行ったり左に行ったり、或いは下世話な話から高尚？なことまで、書いて行って、その折々に、お叱りの言葉や激励の言葉に、一喜一憂しながら、次の話のネタはないかと、日々を過ごしていくのでしょうか。叱られてもケナサレテモ、続けることが出来れば、これに勝る嬉しさはございません。

